

障害児・者の親への支援に関する研究の歴史的変遷についての一考察

－ 「特殊教育学研究」(1980 年 - 2015 年) の文献から －

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
発達・福祉臨床クラスター
長瀬 歩

本稿では、障害児の親の支援に関する論文について「どのような対象、方法、目的で親の支援に関する研究が積み上げられてきたのか」ということを整理するとともに、北川ら(1995)が指摘した「親のストレスに対処する術がない」といった状況がどう変化したのかを示し、同時に今後の親支援研究の方向性を示すことを目的とする。文献の収集にあたって、特殊教育学研究で 1980 年から 2015 年に掲載された論文のうち、親の支援に関するものを本稿の分析対象として収集した。結果、52 件が該当した。これらの文献を、「研究目的・研究対象・研究方法」の観点から分類し、年ごとの流れをみた。

総論文数を 10 年ごとに概観すると、年あたりの論文数が増加してきていることがわかった。

研究目的については、「どのような目的で研究がなされているか」で分類をした。その結果、1980 年代に最もなされた親の困難やストレスを明らかにする研究は 1990 年代に入ると減少し、それと入れ替わるように、親の育て方に対する支援の研究をはじめ、研究目的が一気に多様化したということがわかった。

研究対象については、「どのような障害を持つ子の親が対象となっているか」で分類した。その結果、1980 年代によく見られた「障害幼児」や「障害児」を対象にした研究が多かったところが、年を経るにつれて障害児と健常児を対象にした研究、さらには自閉症、発達障害や HFPDD、重症心身障害児などにバリエーションが増えていっていることから、年代によって注目される障害に変化があったといえる。

研究方法については、「どのような方法を用いて研究されているか」で分類した。その結果、1980 年から 1995 年まで研究のほとんどを占めていた「量的研究」が、2010 年代には「質的研究」に論文数の大部分を取って代わられていることがわかった。大まかに親支援の状況をつかむ量的研究から、個々の事例や実践に降りて、先行研究の知見を詳細に検討する質的研究、特に事例研究へという流れができあがっているように考えられる。

以上のことをまとめ、研究対象を子の障害によって絞らず、より普遍的な親のストレスを明らかにする目的にはじまった障害児・者の親の支援に関する研究が、対象への焦点の当て方が変化し、目的もさまざまなものへ広がり、またそのうえ、親本人への支援や育て方の支援について、実践の記録が積み重ねられてきたことがわかる。つまり北川ら(1995)の指摘があったころに比して、親に対する具体的な支援方法が打ち出され、親の支援がさまざまな角度から研究されるようになってきていることが明らかになった。